庵（いほり）　政三（まさぞう）

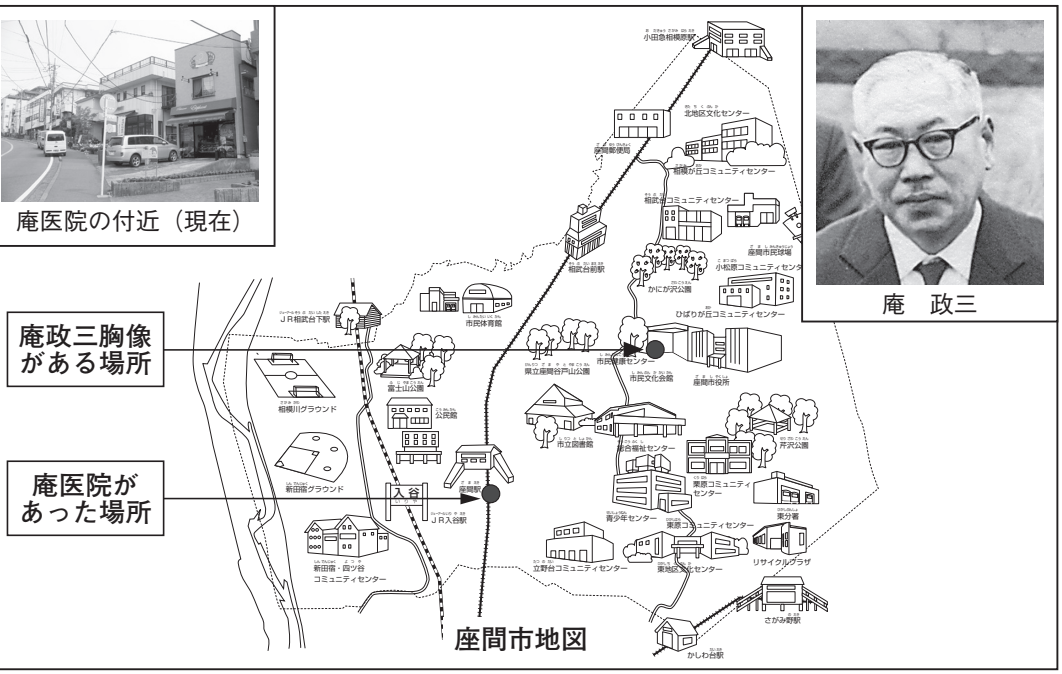
地域医療（ちいきいりょう）に尽（つ）くして

文　馬場（ばば）　悠男（ひさお）

絵　有山（ありやま）　周一（しゅういち）

庵医院の付近（現在）

庵　政三



座間市地図

西暦	和暦	年齢	できごと	時代背景
一九〇一年	明治三四年	0歳	神奈川県三浦半島の浦賀で生まれる。	
一九一四年	大正　三　年	13歳	兵庫県立第二神戸中学に入学する。	一九〇四年 日露戦争 一九一四年 第一次世界大戦
一九二一年	大正　十　年	19歳	松本高校に入学する。	
一九二五年	大正十四年	24歳	官立金沢医科大学に入学する。	一九二三年 関東大震災
一九三二年	昭和　七　年	31歳	中林志津と結婚する。	
一九四六年	昭和二一年	45歳	座間で開業する。	一九三九年 第二次世界大戦
一九五四年	昭和二九年	52歳	八畳ほどの建て増しをして、勉強部屋が完成する。	
一九七一年	昭和四六年	70歳	二月二五日、亡くなる。	一九六四年 東京オリンピック

【文・絵　作者紹介】

馬場悠男は座間市の教育委員で、子どものときから庵医師の患者でもあったので、今回の文章を執筆した。有山周一は座間市内小学校の教頭で、挿絵を担当した。なお、座間市「ひまわりプラン」冊子のイラストも担当した。

昭和二十年代から四十年代にかけて、座間市入谷に、庵政三という「内科・小児科」のお医者さんがいました。この先生は、身体が大きく、声も大きく、顔つきがごつくてというのはまあ良いとしても、言葉使いが乱暴で、ときには言うことを聞かない患者を怒鳴りつけたり、「バカヤロー」と呼んだりすることもありました。

今だったら、こんなお医者さんはどこにもいないでしょう。もし、いてもそんなお医者さんには誰も行きたがらないでしょう。

でも、庵先生は、お金の払えない患者でも診てあげましたし、急病なら夜中でも往診してくれました。

当時は、貧しい人も多く、すぐに来てくれる救急車もなかったのです。しかも、庵先生はどんな病気や怪我でも診てくれました。

実は、私は庵医院の隣に住んでいました。

座間市入谷
当時の座間は、昭和十二年に「座間町」となり、その後、戦争の影響で昭和十六年から二十三年までは「相模原町」として合併し、昭和二十三年からはまた「座間町」になった。現在の「座間市」になったのは、昭和四十六年十一月一日である。

往診
病人のいる家にお医者さんが病状を診に行くこと。

あるとき、三歳だった弟が、額を鉄棒にぶつけて、ぱっくりと傷口が開き、骨が見えて、顔中血だらけになりました。母親は弟を抱いて大慌てで医院の玄関に飛び込みました。

庵先生は、骨に異常がなく、意識もしっかりしていることを見極め、母親が抱いたままの弟の傷口を、玄関で、麻酔もしないで、あっという間に縫い合わせてしまいました。大泣きをしていた弟もじきに泣き止みました。さすがに、軍医として戦場で大けがをした兵士たちを治療した経験がなければ、これほど手際よくはいかなかったでしょう。

庵政三の胸像

私自身も、小学校一年生のときに、指を怪我して爪が化膿したら、麻酔もしないで爪を引っこ抜かれ、悲鳴を上げたことを覚えています。ずいぶん乱暴ですね、でも、爪はきれい

麻酔
薬を使って痛みなどの感覚を無くして、手術を受けても痛みを感じないようにすること。

化膿
ケガをした部分に膿ができること。

に生えてきました。

地域の人々は、庵先生がいることで、どれほど心強かったかわかりません。みんな、庵先生を慕い、心から尊敬していたのです。そして、庵先生が亡くなったときには、町民がこぞって寄付をして先生の胸像を建てることにもなったのです。

では、庵政三は、なぜ、どのようにして、このような医師になったのでしょうか。それを知るために、彼の生い立ちをたどってみましょう。

誕生から中学校まで：突然知った驚きの事実

政三は明治三十四年（１９０１年）に神奈川県三浦半島の浦賀で、生まれ、育ちました。造船所に勤める工員の父親・松賀金太郎、母親のハツ、そして十一歳年上の兄・健蔵に囲まれ、貧しいけれど幸せな少年時代を送っていました。学校の成績は抜群だったそうです。その兄はこう言っています。

胸像
１９７２年旧座間市文化福祉会館（現消防本部敷地内、緑ケ丘六ー一ー五）に建てられたが、２０１４年市民健康センター前（緑ケ丘一ー一ー三）に移設された。八月十日の胸像移設除幕式には、政三の三人の息子たちがその奥様とともに出席した。

浦賀
神奈川県横須賀市東部にある地域。

「子どもの頃の政三は、まあちゃん、まあちゃんと、近所の人たちからもかわいがられて、素直な良い子でした」

ところが、そんな良い子だった政三の心を大きく揺さぶる事件がありました。母親のハツは、子どもたちにしっかりとした教育を受けさせようとして、まず、長男の健蔵を東京の中学校に入れ、高等工業専門学校にまで進学させました。これは、当時は田舎だった浦賀では珍しいことでした。日本全体でも、よほど豊かな家庭しか高等教育を受けさせることができない時代だったのです。

大正三年（１９１４年）には、政三も新設の神奈川県立第四中学校を受験して合格しました。しかし、入学できませんでした。それは、政三の本籍が神奈川県ではなかったからです。実は、政三は米屋で働く高瀬イシの子でしたが、事情があって、松賀夫婦に引き取られ、育てられていたのです。しかも、戸籍上は、育ての母・ハツの母親で石川県に住んでいた「庵はる」の養子になっ

高等工業専門学校
第二次世界大戦後の学制改革が行われるまで存在した旧制高等教育機関の一つで、工業に関する専門教育を施した旧制専門学校。略して「高工」とも呼ばれる。

神奈川県立第四中学校
現在の神奈川県立横須賀高校。

ていました。つまり、政三の本籍は石川県なので、神奈川県の県立中学に入ることはできなかったのです。

実力があるのに中学に入れないこと、そして自分が松賀家に引き取られた子であって、最愛の家族と血のつながりがないことを知った政三の心は、大きく傷つきました。落ち込んでしまい、自分を捨てた実の親を恨むようなこともありました。

ただし、大人になって、一度だけ実母に会ったことがありましたが、恨み言は一切言わなかったそうです。

さすがに、素直だった政三も、かなり反抗的になったそうです。

そんな人生の危機を救ったのは、兄の健蔵でした。すでに神戸の三菱造船所に勤めていた健蔵は、政三を呼び寄せ、兵庫県立第二神戸中学校に入学できるようにしてくれたのです。二人は仲良く暮らしましたが、お金がないので、休みにはいつも六甲山に登っていました。

第二神戸中学校
現在の兵庫県立兵庫高校。

六甲山
兵庫県神戸市にある標高932mの山。

中学二年生のとき、育ての母のハツは、政三に医者になるように言い遺して、五十六歳で亡くなりました。医者は人を助ける職業だからというのが、その理由でした。政三の心に、ハツから受けた愛情と恩恵を社会の人々に返したいという気持ちが芽生え、大きく育っていきました。

中学三年生のとき、兄・健蔵の勤め先が東京に変わったので、政三は東京の錦城中学に転校しました。そこでは、勉強ができるよりも腕っ節が強い方が幅をきかせるというバンカラな校風があり、体力のあった政三もそんな校風に染まっていきました。庵医師の乱暴な言葉づかいは、そのときの影響でしょう。

松本高校時代：ゴリラの活躍

※大正十年（1921年）、二年間の浪人の後で、政三は長野県の旧制松本高校の

恩恵
めぐみ・いつくしみ。

錦城中学
現在の私立錦城学園高校。

バンカラ
言動などが荒々しいさま、またはあえてそのように振る舞う人。

※学校制度については、学校系統図（57ページ）を参照。

理科に入学しました。まもなく、ゴリラというあだ名が付きました。それは、他の生徒より年上で、身体が大きく、体力抜群で、声も大きく、運動会や学園祭のリーダー的な存在だったからです。山に登るときも先頭を歩き、駅伝競走では上り坂を走りました。みんなから信頼されて、いつもクラスの総代でした。勉強もできて、試験の間際には、できない生徒の勉強の世話をしていたそうです。

そんな明るく豪放磊落な性格の政三にも、悩みがありました。一つは、不況のせいで、兄からの仕送りが途絶えたことでした。生活は困窮を極め、自分の学生服がボロボロになったので、友人からもらった窮屈な学生服を無理して着ていたくらいでした。当時は奨学金の制度はなかったので、校長先生に頼んで、特別に授業料の一部を免除してもらいました。

もう一つは、心から甘えられるような肉親がいなかったことです。夏休みや冬休みにも、他の生徒のように家には帰りませんでした。もちろん、育て

旧制松本高校
新制信州大学発足時にその母体の一つとなった。当時の旧制高校では、官立大学進学の予定に合わせて、クラスが文科と理科に分かれていた。

総代
全体の代表者。

豪放磊落
気持ちが大きく快活で、小さな事にこだわらないこと。

奨学金
能力のある学生に対して給付、貸与される金銭。

てくれた父・松賀金太郎のところへ帰ることもできましたが、迷惑をかけたくなかったのでしょう。寮で寂しそうに座り込んでいる政三の姿に気が付いた友人もいました。そんな気持ちを吹き飛ばすために、政三はゴリラのように威勢良く歩き、大声でデカンショなどの寮歌を歌っていました。

戦前の高等学校は現在の高校三年生と大学一、二年生に当たり、青年期の人間形成に重要な時期です。政三も数人の親友ができて、彼らとの友情は生涯にわたって続きました。そんな親友の一人、高橋希人の短歌です。

「※はげしかる 性のうらなる 寂しさに 時にふるれば 眼もて笑いぬ」

大正十二年（1923年）、関東大震災が起きました。松本にいた政三は、すぐ餅をいっぱい買い込み、リュックサックにつめこんで、信越線の列車で東京に向かい、なんとか赤羽に着きました。そこからは、震災で壊滅状態の東京を通って七十五キロほど離れ

デカンショ
旧制高校で多く歌われた応援歌、デカンショ節「デカンショ、デカンショで半年暮らす、後の半年ゃ寝て暮らす。」また、デカルト・カント・ショーペンハーウエルという哲学者の名前を略し、はやす学生もいた。

※激しい気性の裏に潜む寂しさに触れる機会があると、目だけで笑っている。いつもと違って寂しそうにしている政三に、どうしたと声をかけると、目だけで笑って、何でもないと返事をするような情景である。激しい気性は、本人の性格だけでなく、複雑な生い立ちも影響していたのであろう。なお、寂しいことや苦しいことを自分の中だけに秘めておくのは、後の政三の聖医としての働きぶりにも通じる。

た浦賀まで歩いて行きました。育ててくれた父親のことが心配だったのです。

医学校から軍隊：熱血軍医としての勤務

大正十四年（１９２５年）に官立金沢医科大学に入学した政三は、陸軍委託学生を志願しました。学資が軍隊から支給されるからです。昭和四年（１９２９年）に卒業した政三は、日本陸軍の軍医となりました。

ほどなく、満州事変や上海事変が起こり、日中戦争・太平洋戦争が長く続きました。その間、政三は軍医として何度も戦地に赴き、ゴリラのように力強く、次々と傷病兵を治療し、仲間たちからも慕われました。

ところが、昭和七年（１９３２年）の第一次上海事変の停戦に伴う記念行事の式場で爆破事件が起こりました。政三も式典に参加していたのですが、治療道具を持っていなかったので、大けがをした人々を救うことができなかったという、痛恨の失敗をしてしまいました。もちろん、記念式典に出席する

赤羽
東京都北区にある地域。

官立金沢医科大学
現在の国立金沢大学医学部。

学資
学校に通うことに必要な資金。

赴き
ある場所に向かって行くこと。

第一次上海事変
１９３２年に中国の上海共同疎開付近で起きた日中戦争の発端となった日本と中国の軍隊の衝突。

痛恨
非常に残念に思うこと。

ときに治療道具を持たないのは、責められることではありません。むしろ、運が悪かったと言うべきでしょう。

しかし、政三は、この失敗を取り戻すべく、軍医としての勤務のかたわら、猛勉強をして陸軍軍医学校の甲種学生になりました。それは、今なら、国立大学医学部の大学院博士課程に入ったようなものでした。そして、内科医としてもレントゲン診断の第一人者とまで言われるほどになりました。

昭和十五年（１９４０年）に戦局が激しくなると、政三は自ら志願して軍医として再び中国に赴きました。苦労して育った政三は、医学の研究をして出世するより傷病兵を救おうと考えたのです。そして、昭和二十年（１９４５年）に戦争が終わってからは、旧東京第三陸軍病院の内科医長として勤務しました。当時、病院は数多くの傷病兵でいっぱいでした。食料が足りなかったので、政三は、入院患者のために、自ら病院の庭や周りを開墾し、畑で芋や野菜を作ったそうです。いかにも、青年期に苦労した政三らしいですね。

旧東京第三陸軍病院
現在の独立行政法人国立病院機構相模原病院。

戦後の暮らし：庵医院の診療と家族の生活

実は、家族の生活も大変でした。昭和七年（１９３２年）に中林志津と結婚した政三には、政志・幸雄・征行という育ち盛りの息子が三人いました。しかし、終戦当時はインフレが激しく、食糧事情が悪かったので、公務員の給料だけではまともに暮らせませんでした。そこで、政三は、医院を開業して子どもたちを養おうと決心しました。それは、国立病院の医師として高い地位に昇る可能性を捨てることを意味していました。

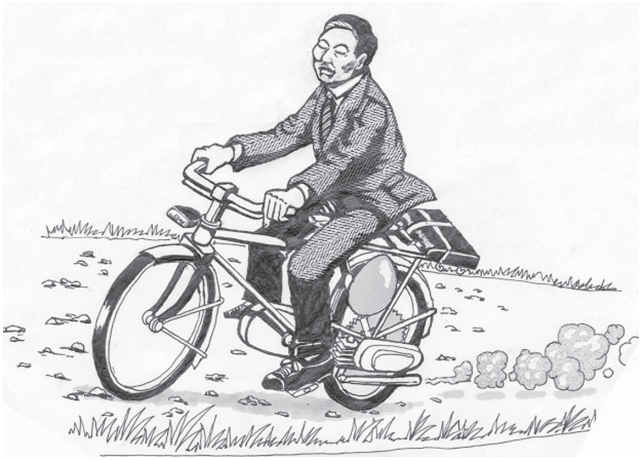
ちょうどその頃【昭和二十一年（１９４６年）】、陸軍士官学校の下士官宿舎だった座間町入谷の天台住宅が民間に払い下げに

インフレ
物価水準が上がり続けること。

下士官
軍隊の階級で、将校の下で兵の上の立場で兵を統率する立場。

なり、そこで医院を開業することにしたのです。この陸軍士官学校の跡地は、今は在日アメリカ軍司令部のある座間キャンプになっています。

庵医院はすぐに繁盛したのでしょうか。いや、とてもそんな状況ではありませんでした。当時、座間町には古くから開業している医者が五軒あり、それぞれなじみの患者を持っていました。しかし、農村部には貧しくてまともに医者にかかれない人々がいることを知った政三は、それらの人々の医療を引き受けることにしたのです。



坂の多い座間町を遠くまで古自転車に乗って往診に出かけました。夜中でも患者が来れば診てあげました。しかも、治療代は他の医者に比べてとても安かったのです。診察代や薬代の払えない患者からは、代わりに大根やサツマイモをもらった

こともあり、何ももらわなかったこともありました。もともと軍医であり国立病院の医師であった政三は、患者から直接に治療代をもらうことに抵抗感があり、できるだけ安く患者を診てあげたのです。

すると、たちまち、安くて親切な先生という評判が立ち、患者は増えていきました。

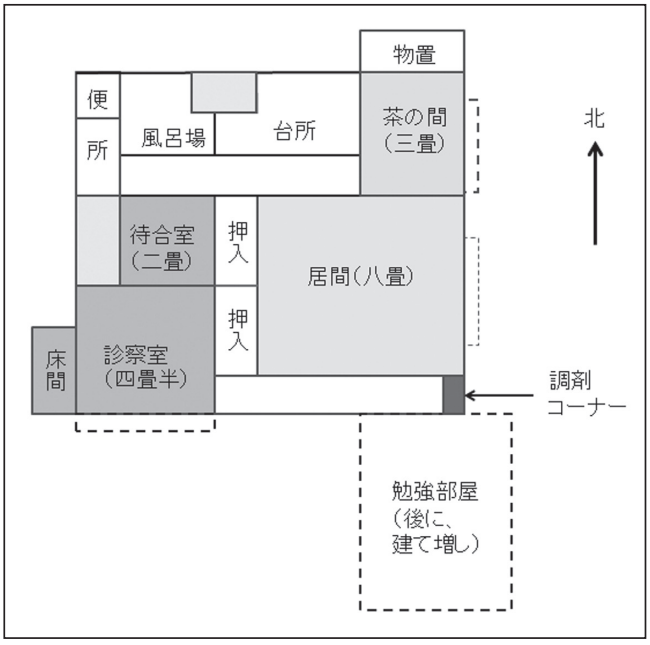
昭和三十年代に、国民健康保険の制度が本格的に実施されると、患者の負担が減ったことを喜んだそうです。もちろん、保険点数を多くするような治療方法はとりませんでした。当時の座間町役場の係員によると、「この町で保険診療件数が一番多いのは庵先生でしたが、一件平均の支払額の一番少ないのも庵先生でした」とのことです。

そのため、庵家の家族の暮らしはちっとも楽にはなりませんでした。普通の医院では、自宅とは別に医院のスペースがあります。しかし庵医院は、自宅の一部を医院として使っていました。玄関の二畳の和室が待合室、その隣

の四畳半が診察室。家族が生活するのは八畳の居間と三畳の茶の間しかありませんでした。トイレも家族と患者が共用でした。そこで親子五人が暮らしたのです。昼間は、兄弟げんかもできませんでした。

１９５０年代から１９６０年代にかけて高度成長期を迎えた日本では、少しでも余裕のある家は子どもたちに勉強部屋を与えようとしました。庵家でも、やっと、昭和二十九年（１９５４年）に八畳ほどの建て増しをして、兄弟三人が一緒に使う勉強部屋ができ、子どもたちは大いに喜びました。

そのときには、東京大学の医学進学課程に入学していた長男の政志さんは、「勉強部屋ができる前は、冬の寒いときでも、私たちは廊下や風呂場で勉強し



当時の間取り

ていました」と言っています。

やがて、次男の幸雄さんは東京大学の工学部に、三男の征行さんは東京大学の経済学部に進むことになります。

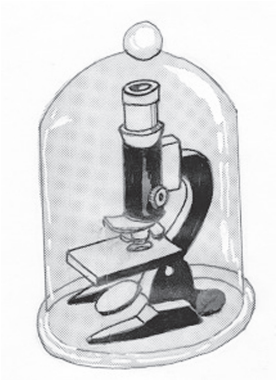
庵医師の多忙な一日

庵先生は、一人だけ待合室で寝ていました。夜中や早朝に患者が来たときに、玄関の戸を何遍もたたいたり大声を出したりして家族や近所の人を起こすといけないので、すぐ気が付くようにしていたのです。いつも朝早く、五時前には起きて、庭木の手入れをし、診察室の掃除をして、診療器具の熱湯消毒をすませ、患者を待っていました。万事節約の医院には、先生だけで、看護師も薬剤師もいませんでした。

私が小学生のときの記憶です。待合室にいると、先生が「よーし、次の人」と声をかけます。木の引き戸を開けて診察室に入り、いつものように、先生

万事　なにごとも、どんなことでも。

の横の机に置いてある憧れの顕微鏡をちらっと見ます。釣り鐘型の茶色いガラスケースに入った顕微鏡の黒と金色のコントラストが本物の重厚さを表しています。



「先生は、あの顕微鏡でバイキンを調べるんだ」と想像するのです。

「おー、おまえか、どうした」と言いながら、先生が棚からカルテを取り出します。

「喉が痛くて、風邪みたいです」私はすこし緊張して答えます。

「口、開いて」と先生。

先生は、頭※に付けた丸い鏡の向きを調節して、私の横に置いたスタンドの光を反射させ、

※額帯鏡という、医師が診察する際に着用することで、前面にある凹面鏡が電球の明かりを反射して診たい部分に光を集中させ、空いた孔から診察しやすくするもの。

喉の奥をのぞきます。「そのまま」と言って、先生は、※金属棒の先に付けた脱脂綿に※紫色の消毒薬を付けて、喉の奥に差し込み、素早く腫れている扁桃腺をぬぐいます。

「たいしたことはねえな、薬出すから」

数人の患者を診たら、先生は、診察室から出て、廊下をどしどし歩いて、突き当たりにある調剤コーナーに行きます。そこで、手早くそれぞれの患者の薬を調合し、当時は粉薬が多かったので、一人あたり十個あるいは二十個も、きれいに薬包紙に包み、紙の袋に入れます。

先生は、再び、どしどし廊下を歩いて待合室に現れ、数人の患者に飲み方

※**咽頭捲綿子**という、まさに脱脂綿に消毒液を付けて喉の奥を治療する器具。

※**ルゴール液**という、ヨウ素やヨウ化カリウムを含んだ、独特のにおいがある赤褐色の水溶液で、殺菌剤として患部に塗布する溶液。

薬包紙
粉薬や粒剤を服用1回ずつに分包するために用いる薄手の紙。

の注意をしながら薬の袋を渡します。

そして、次の診察が始まります。

夜も庵先生は、好きなお酒を二合しか飲みませんでした。それは、患者がやってくるかもしれなかったからです。また、最新の医学知識を身につけるために、いつも勉強をしていたのです。子どもたちも、そんな父親を見て育ちました。

自転車から自動車へ

庵医院は、座間駅から立野台の方へ向かって大通りを二百五十メートルほど行った右側の崖の上にありました。大通りから庵医院までは、まっすぐな階段と、くの字に曲がった急勾配の砂利道がありました。

庵先生がオートバイで往診から帰ってきて、崖の下に近づくとエンジンの排気音が聞こえます。すると、家族や二、三人の患者が飛び出していきます。庵先生は、Uターンして、五十メートルほど戻ってから、全速力を出して急

急勾配
傾斜が急であること。

坂に挑みます。

しかし、当時の馬力のないオートバイでは急坂を登り切れないので、途中からみんなで後押しをするのです。やがて先生が六十歳のとき、軽自動車のスバル360が発売されると、それを購入し、大きな身体を小さな車に押し込んで往診に出かけました。

庵先生はこう言っています。

「脚が弱くなって自転車のペダルを踏むのがつらくなったと思ったら、バタバタができやがった。バタバタもオートバイも脚は楽だが、冬の夜の往診なんかじゃあ手足が冷えきっちまう。帰って布団にもぐりこんだって、眠れやしねえ。俺も齢をとったなあと思うようになったら、今度は小型自動車ができや

スバル360
広く国民に乗られた自動車。

バタバタ
自転車にエンジンをのせたのりもの。

がった。全く世の中って、ありがたくできてるもんだよ」

実は、自分の身体や齢のことだけではなく、やっと小型自動車が買えるような経済状態になったということです。

ここに聖医ありき

昭和四十六年（１９７１年）一月、庵先生自身が病気療養のため二月から一年間休業するとの葉書が、患者たちに郵送されてきました。

実は、庵先生はその数年前から直腸癌にかかり、半年ほど前から肝臓に転移した癌がひどくなり、今にも死にそうだったのです。それにもかかわらず、痛み止めの注射を打って夜中に往診をすることもありました。また、千人以上もの患者のカルテを整理し、他の医者への紹介状を書いていました。

それとは知らずに、患者たちは「庵先生ありがとう会」を結成し、多くの人々の感謝の言葉を添えて、庵先生の好きな山の絵やベートーベンのレコードを

贈り、ゆっくりお休みくださいと伝えました。一年後には、また医院が開くと思ったのです。

予告通り、二月一日に医院は休業となりました。先生は入院することもなく、一切の治療を拒否し、息子たちに見守られながら、自宅で静かにその時の来るのを待ちました。先生は「人生七十年、長くもなし、短くもなし」と、三男の征行さんに言ったそうです。なお、妻の志津さんは二年近く前に亡くなっていました。

まもなく、二月二十五日に、庵先生は亡くなりました。

自宅で質素な葬式があった二十七日は、小雨の降る寒い日でしたが、先生の死を知った町民たちは、次から次へと弔問に訪れました。友人代表の髙橋希人、医師会代表の鈴木英夫、そして患者代表の飯島嘉一が弔辞を読み、大勢の人々が涙を流しました。火葬場に行く霊柩車についていった人もたくさんいました。

髙橋希人
同級生で、医師であるとともに、北原白秋の高弟。息子さんたちも医師で、政志さんとの付き合いもある。

弔辞
亡くなった人への最後のお別れのことば。

それを見た高橋希人の詠んだ短歌です。

「※任侠の 医とし一代を了えしこと 町のなげきの 声にいま知る」

庵先生が亡くなった直後に、町民の多くから、先生への感謝を表すために、そして先生にいつでも会えるように、ブロンズの胸像を立てようという声が上がりました。「庵先生ありがとう会」が中心になって寄付を募ったところ、座間町の半数以上の家庭から寄付が集まりました。これは、いかに庵先生が町民に愛されていたかを示すとともに、苦しい時代を共に生き抜いた昭和世代の人々の優しさと心意気を示すものと言えるでしょう。

昭和四十七年（１９７２年）四月二十二日、座間市文化福祉会館の横で、座間市の関係者、庵政三の息子たちとその家族、そして兄の健蔵が参加して、胸像の除幕式が行われました。胸像の台座には「ここに聖医ありき」の文字を刻んだ銅版が埋め込まれていました。

長男の政志さんはこう言っています。

※貧しい人々の医療に心から尽くして一生を終えたことを、町の人々の嘆きの声の大きさで、今ようやく知ったのだ。任侠は、弱きを助け強きをくじく気性に富むこと。

「幼いときに義理の父母と兄の深い愛情によって優しく育てられたことが広く豊かな心を作り上げ、中学や高校の時の苦労がバネとなってどんな苦難に遭ってもくじけない性格を形成したのでしょう。父は、指導的立場に立って医療を改革することを目指したかったのでしょうが、さまざまな事情がそれを許さなかったのだと思います。そして、座間の地域医療に専心することになったのです。」

その政志さんは、東京大学医学部を卒業すると、貧しい患者が多い浅草寺病院に勤めました。そして、東京大学病院講師、獨協医科大学助教授を経て、日本赤十字社医療センターの内科部長そして副院長になりました。飲酒による肝障害研究の第一

昭和３２、３年頃の正月
【近所の人々と一緒に、右端が庵政三】

改革
従来からある制度などを改め、よりよくすること。

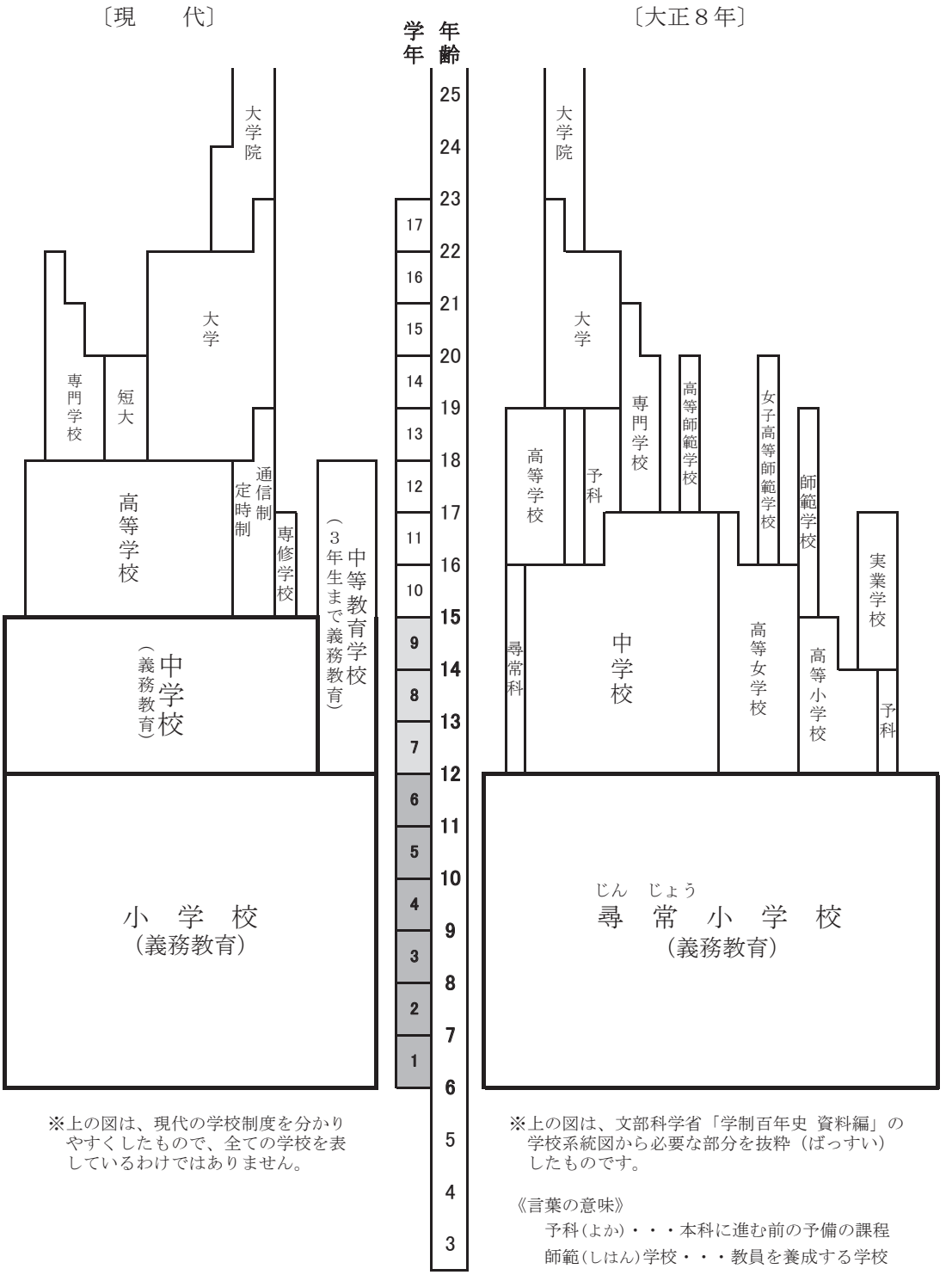
人者です。これは、父・政三の代わりに、国民の医療を考える立場になったことを意味します。

【参考・引用文献】

福林正之（1972）「庵政三の生涯　ある聖医伝」　筑摩書房

※文中の歌の解釈にあたり、座間市短歌連盟の伊田登美子様にご協力いただきましたことに感謝いたします。

【学校系統図】



※上の図は、現代の学校制度を分かりやすくしたもので、全ての学校を表しているわけではありません。

※上の図は、文部科学省「学制百年史 資料編」の学校系統図から必要な部分を抜粋（ばっすい）したものです。

《言葉の意味》

予科（よか）・・・本科に進む前の予備の課程

師範（しはん）学校・・・教員を養成する学校